島の船着場を一気に飲み込んだ津波

宮城県塩竈市浦戸消防団
団長

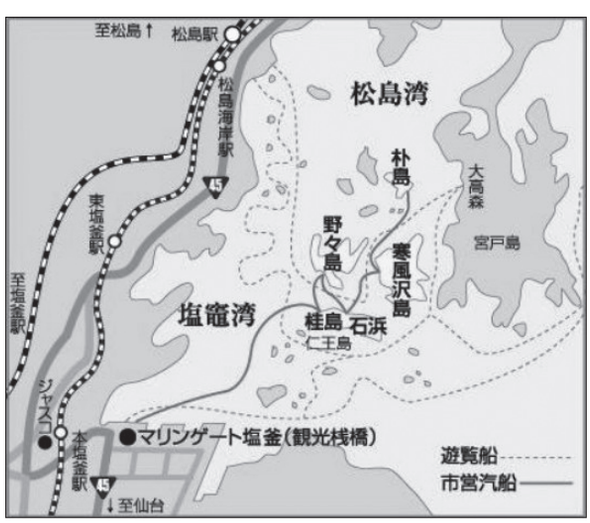
内海　　勝（67歳）
消防団歴　40年
（海苔・牡蠣養殖手伝い）

宮城県塩竈市浦戸消防団
第２分団　分団長
（桂島担当）

内海　新一郎（63歳）
消防団歴　42年（海苔養殖）

塩竈市の概要と被害状況

塩竈市は宮城県のほぼ中央、仙台市と日本三景で知られる松島との中間に位置している。日本有数の漁港を中心とする港町、および陸奥国一宮・鹽竈（しおがま）神社の門前町として栄えてきた。近代になってからは近海・遠洋漁業の基地としても発展し、「日本有数の生鮮マグロの水揚げ港」に代表されるように、新鮮な魚介類が豊富にあり港町独特の食文化がつくられている。また、水産加工業も盛んで、笹かまぼこ、揚げかまぼこなどの水産練り製品など、日本一の生産量を誇るものが数多くある。塩竈市の区域内には、松島湾内に点在する桂島（桂島・石浜）、野々島、寒風沢島、朴島の四つの島と５つの地区があり、塩釜港（マリンゲート塩釜）から各島をつなぐ汽船が出航している。



浦戸諸島の位置（塩竈市ホームページより）

塩竈市の総面積は17.86㎢、人口は５万6,337人、世帯数は２万1,951世帯、浦戸諸島の桂島（人口231人、世帯数93世帯）、石浜（人口58人、世帯数26世帯）、野々島（人口102人、世帯数50世帯）、寒風沢島（人口168人、世帯数74世帯）、朴島（人口30人、世帯数24世帯）となっている（平成24年１月末現在）。

塩竈市浦戸消防団は１本団２分団５部14班、67名で構成されている。今回の震災により、島しょ部の寒風沢島と野々島の消防団詰所が全壊、石浜でシャッター等の破損被害がでた。

東日本大震災では、塩竈市で震度６強を観測し、人的被害は死者31人、行方不明者１名、負傷者10人、住家被害は全壊757棟、半壊3,713棟となっている。浦戸地区は全島で居住地区が浸水（床上浸水370棟、床下浸水15棟）し、家屋の半数が流失や全壊した。今回の活動記録は、桂島を担当する第２分団と野々島を担当する第１分団の記録である。

揺れを感じて駄目かも知れないと覚悟（内海勝消防団長）

震災当時、第２分団長だった私は、当日は朝から海苔養殖を手伝っていた。昼過ぎになり、海を望める南斜面の途中にある自宅に戻って遅めの昼

津波が運んだ瓦礫で家屋にも被害が発生（桂浜地区）

食をとっていた最中に猛烈な揺れに襲われた。「これはただ事ではない」と、すぐに詰所に駆けつけた。団員たちが次々に集まってきた。

防災行政無線が大津波警報を伝えていた。ラジオも最初は「５、６ｍの津波」という情報を流し、その直後に「10m」と訂正していた。防災行政無線はほどなく通じなくなり、ラジオが唯一の情報源になった。

峠道坂乗り越え迫る津波

まずは年寄りたちを避難所に手分けして誘導しようということになった。私は、団員たちにその指示を出す一方で、津波のことも気になった。潮位の変化を見守ろうと、離島航路の船着場の岸壁のあたりに目を凝らした。しばらくすると、海面が１、２ｍくらい下がり、次に沖から別の波がかぶさるように打ち寄せてきた。それにつれて、ゆっくりと水かさが増し始めた。

チリ地震津波の時も水が引くことから始まった。その引き波は、一気にかなり沖まで後退していた。それに比べると今回の海面の挙動は当初、穏やかだった。これなら、たいしたことはあるまい、と思っているうちに海面が岸壁の高さまでせり上がってきた。その途端に、ワァーと猛烈な速さで盛り上がった水勢が一気に船着場を飲み込んでしまった。

「こりゃあ、だめだ」

そう感じた私は、自宅に通じる上り坂を必死で取って返した。坂道の峠越えをして南側へ下らなければならないのだが、登り切る前に坂道のてっぺんを乗り越えて覆いかぶさるように迫る濁流が目に入った。水の高さは２ｍくらいあったように見えた。とっさに道路脇の住宅に通じる階段を駆け上がり、濁流に巻き込まれる寸前で、なんとか命拾いをすることができた。

南に開けた海水浴場の方角から押し寄せてきた津波の勢いが凄まじかった。私が監視していた北側の船着場を襲ったのは、南側から回り込んだ余波だったのだ。引き波が収まった後の周囲の風景は一変していた。どこに道路があって、どこが住宅の敷地なのか、全く判別がつかないほどの荒れようだった。雪も降りしきって視界も遮られる中を、私は藪や畑を通り抜け、滑ったり転んだりしながら道なき道をよじ登って島民が集まっている避難所に、やっとの思いでたどり着いた。６年ほど前に廃校になった旧浦戸第二小学校が避難所なので、暖房装置も整ってはいない。

あの日、桂島では被害者はゼロだった（内海新一郎　第２分団長）

震災当時、第２分団の副分団長だった私は、地震直後に母親（89歳）が気がかりで海苔・牡蠣養殖の作業を中断して自宅に戻り、後を追って帰宅した息子（30歳）に母親を連れて避難所に行くよう託した。避難所となっていた旧浦戸第二小学校の体育館の外で、いきなりバリバリという不気味

な音が伝わってきた。桂島と隣り合う野々島との間を流れる石浜水道を激しく通り過ぎる津波の音だったのだ。

気力失せ脅え切る老夫婦

停電で明かりはつかず、寒さが身にしみる避難所では、消防団が保管していた暖房具や投光機、発電機などを若い団員たちが運び込んで、避難者たちの世話に当たっていた。津波や余震が少し落ち着いたころを見計らって、団員たちは管内の建造物の被害状況を調べて回った。地震による倒壊はなかったのに、その後の津波で被災し流失した家屋も含めると50戸ほどが被害を受けた。

桂島分団地区の戸数は86戸。このうち、なんとか被害は免れた住宅もあったが、停電、断水で普通の日常生活できる状態ではない。結局、全員が避難所での生活を余儀なくされた。津波の被害を受けなかった10戸ほどの住民たちと話し合い、自宅にあったストーブなどを避難所に提供してもらった。

離島なので、どこの家庭でも燃料用のタンクを備えており、ストーブの燃料も提供してもらった。流失した住宅で設置してあった燃料タンクも燃料が入ったまま、藪の中に引っ掛かっていたり瓦礫の下に埋もれていたりして見つかった。どれも所有者の名前が明記されていたので了解を取り、回収をして利用させてもらった。

避難所を少し下がった所には、老夫婦だけで住んでいる２階建ての住宅がある。外見からは被害を受けた様子は見当たらなかったが、私は気がかりだったので津波が落ち着いたころを見計らって、様子を見に行ってみた。近づくと、１階は明らかに床上浸水の痕跡が残っている。その１階に身体の不自由な男性がいたので驚いた。

「ここは高台なので大丈夫と思っていたが、首まで水に浸かった」と、男性は疲れ切った様子で話してくれた。夫に急かされて階段を上がった妻は、２階で脅えきっていた。私はすぐに避難所に移るように誘ったが、２人ともすっかり気力を失った様子で、自宅から出ようとする気配を見せなかった。だからと言って、そのまま引きさがることはできず、根気強く説得して男性を背負い、２人とも避難所に移ってもらった。

海水浴場に面していた約30戸の家屋が流出

離島の生活習慣が役立つ

救援活動の自衛隊が飲料水や食糧を届けに来てくれたのは、発災から４日ほど経っていた。それまでの間は、自給自足で頑張った。避難所に備蓄してあったわずかな乾パンや飲料水を分け合って凌いだ。泥水を被らずに助かった米が見つかった、といって供出してくれる住民もいた。井戸水を利用して炊き出しをして、握り飯を作った。悪天候で船便が欠航して物資が届かぬこともある。そうした非常時を想定して、各家庭では業務用の大きなストッカーを備えている。その中に蓄えてあった食品も、皆で分け合い利用した。

避難所にはすでに220人ほどが集まっていた。島外から仕事で来島していた数人も混じっていた。地元の避難者は高齢者が多く、避難所暮らしで体調を崩した人もいた。防災ヘリに出動してもらい、病院に搬送してもらった高齢者も10人ほどいた。

避難所暮らしが始まったころはまだ寒さが厳しく、高齢者が多かったこともあって、暖房具は一日中つけたままにしていた。給油や火の用心も全員が交代で行った。

桂島桟橋付近（３月25日撮影）

屋根や道に雪が残っている（３月12日撮影）

桂島では、あの地震・津波による被害者は外来者も含めてゼロだった。

浦戸消防団第２分団（桂島）の団員は総勢26名。このうち11名はサラリーマンで職場が島外にある。東日本大震災が発生した当時、島内にいたのは15名。このうち、52歳以下の比較的若い団員は11名だ。詰所も水をかぶったが、若い団員たちがポンプ車を事前に高台に運び上げてくれていたので助かった。津波が引いた後は崩れた石塀やブロック塀の残骸がゴロゴロところがって坂道を塞ぎ、通行不能になっていた。この障害物を取り除く作業も若い団員たちが精力的に引き受けていた。地震には耐えた海水浴場沿いの道路は、津波ですっかり破壊されてしまった。

離島での断水は、深刻な生活用水の不足につながる。離島と本土を結ぶ定期船も不通のままで、復旧のめどは立っていなかった。３月14日ころに内海勝分団長（当時）は、本土の塩竈まで水をもらいに行こうと決めて、被災を免れた自分の船を操り出した。しかし、海はどこもかしこも瓦礫で埋め尽くされ、右に左にかじを切り、思うように進めなかった。普段は塩竈港まで15分ほどで行けるのに、この日は倍以上の時間がかかった。

煙を上げているは仙台港のコンビナート火災（写真奥）

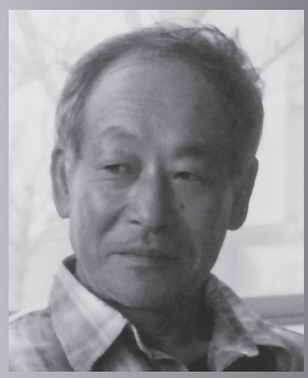
塩竈港では、大地震が起きた日に用事があって本土に出掛けたまま音信不通になっていた私の妻と再会できた。帰りの船には、妻も乗せて戻った。

チリ地震津波の時、自分は中学一年生だった。「えらい波が来た」という記憶は今でも残っているが、冠水したのは坂道を下り切った辺りまで。低い土地にある住宅が床上や床下浸水になった程度で、今回のような家屋の流失などは全くなかった。東北地方太平洋沖地震は宮城県沖地震とも違って大きな揺れがずいぶん長く続いたように感じた。でも、津波についてはチリ地震津波や宮城県沖地震の時の記憶が刷り込まれていて、たいしたことはなかろう、という淡い期待と思い込みがあった。

旧浦戸第二小学校の校庭を使って、仮設住宅が建設された。内海勝分団長（当時）は約４か月間続けた避難所での暮らしを終えて、７月５日に仮設住宅に移った。私も自宅を流され、作業場も津波に破壊されたので避難所で過ごすしかなかった。仮設住宅ができるまで避難所にいたのは、いずれも自宅を失った40人ほどだった。

養殖の海苔棚は、どれも木っ端みじんに打ち砕かれた。東日本大震災の後に私は第２分団長を引き継ぎ、本職の海苔養殖を元に戻すのに３か月ほどかけた。

島民の備蓄食分け合い 自給自足体制で



宮城県塩竈市浦戸消防団
第１分団　班長（野々島担当）　**浅岡　　進**（63歳）
消防団歴　19年（漁業）

下から突き上げるような衝撃が船を襲う

地震が起きた時は、海苔網を引き揚げて岸壁に接岸した船を洗っていた。いきなり下から突き上げられるような衝撃を受けた。その瞬間、海面が湧き上がるように見えた。

「いったい、なにが起きたんだべ？」と思った。当初、地震という認識はなかった。だが、縦揺れが横揺れに変わり、防潮堤がこちらへ傾いてくるのが見えた。地震だ、と気付いた。「大変なことになった」と、身の危険を感じた。一瞬、船から海に飛び込もうかと身構えた。

船から岸壁に飛び降りると、一目散に自宅へ走った。途中で、また揺れた。母親（84歳）が居間のテーブルにつかまって血相を変えていた。野々島の避難所になっている塩竈市浦戸諸島開発総合センター（ブルーセンター）へ、すぐに行くように伝えると、家屋の倒壊やけが人が出ていないか、隣近所の状況に気配りしながら消防団の詰所へ急いだ。

上空から見た野々島（３月25日撮影）

発災時の在島団員は２名

野々島分団は団員が12名。しかし、島内で仕事をしているのは班長の自分と遠藤団員の２名だけ。残りの10名は島外に職場があるサラリーマン団員だ。だから、東日本大震災の当日に野々島にとどまっていた人たちの避難誘導に当たったのは、団員としては私と遠藤団員の２名だけだった。巡航船は動かなくなり、団員たちも帰宅困難者の立場になっていた。

遠藤団員のほかに、野々島の地区長も駆けつけてきた。私たちは島内にある住宅の１軒１軒を見回って、住民たちにガスボンベの元栓を閉めてから避難所へ向かうように指示した。警戒や避難の指示は消防団の任務だが、そこから先の島民の保護・支援は野々島地区の役員たちが中心になって活動した。避難所の運営管理に当たった地区役員９人の中には、もちろん自分も入っていた。

すでに避難して留守になっている住宅は念のため、ガスボンベの元栓の点検も忘れなかった。５人ほどが避難していたブルーセンターに立ち寄ったら、２箇所でガス漏れが見つかった。すぐに元栓を閉めた。

家屋も壊滅状態

野々島桟橋（３月16日撮影）

島一番の高台に避難

津波が到達する前に、島民の大半は高台にある熊野神社の境内に集まっていた。車椅子の人もいた。高台には浦戸第二小学校と浦戸中学校の併設校舎があり、ここも避難所になっている。寒さを凌ぐには屋内がよい。そう考えて、避難場所を学校の校舎に変えることにした。集まった避難者たちを連れて移動を始めた。歩き始めて道路の一番高い所に差し掛かった辺りで、携帯ラジオを聴いていた一人が「女川に６ｍの津波」「いや、６ｍでなく10ｍらしい」と、放送の内容をオウム返しで叫んでいた。

この辺りが島一番の高台だ。津波が来てもここなら安心と判断して、歩いている皆の足を止めた。海岸に視線を据えると、いったん引いていった潮が静かに上昇し始めているのが見えた。海面が防潮堤の高さまで達したと思ったら、大きな波が一気にはじけるように押し寄せてきた。地震の発生から45分くらい経っていたころだった。視界を遮るほどに雪の降り方も激しくなり、はっきり見えない沖の方から「ゴーッ」という轟音だけが伝わってきた。不気味だった。

皆をその場に待たせて、進行方向の様子を見に行った。併設校舎や熊野神社のある高台の周辺を除けば、どこもかしこも津波に洗われていた。津波が引いていく様子を見届けてから、高台に立ち止まっていた人たちを併設校舎に誘導した。中学校はこの日が卒業式で、校内には教員や職員がまだ残っていた。

学校には備蓄米があり、学校に備え付けのガス釜を使って教職員の皆さんが炊き出しのおにぎりを避難者のために作ってくれ、大助かりだった。教職員たちは３、４日間、学校にとどまって避難者の世話に奔走してくれた。

避難生活を支えてくれた教師の中には、対岸の本土にある自宅の地区が津波で大きな被害を受け、家族の被災が懸念される人もいた。地震と津波に対する警戒が薄らぐのを待って、流されずに残っていた船外機付きの小舟で本土の塩竈港へこの教師を送り届けた。

消防団詰所もポンプ車も奪われ

消防団の詰所は、保管してあったホースなどとともに跡形もなく根こそぎ流失してしまった。水門を閉めに行ったポンプ車も、詰所に戻ってきたのが災いして津波にさらわれてしまった。後になってわかったのだが、島内で浸水を免れた民家は高台に建っていた４軒だけだった。しかし、そこの居住者も停電と断水で避難所暮らしをせざるを得なかった。

津波が２階にまで達した住宅はなかったが、１階が１ｍ以上の床上浸水になった建物が多かった。地震で倒壊した家屋はなかったが、津波で大打撃をこうむった。流失した建物はなかったものの、外観は無傷のように見える住宅も内部は見る影もないほどに破壊された。半壊状態もわずかに

土台を残して全て流出した（３月26日撮影）

傾きながらも残った防災行政無線（３月26日撮影）

あったが、ほとんどが全壊の状態になった。妻と２人で手塩にかけてきた海苔筏は見る影もなく消え失せていた。５隻あった船も、１隻は流失した。

流失免れた必需品を活用

海辺に近いブルーセンターも床上50㎝の浸水で、ここに避難した人たちは２階に逃れて津波が収まるのを耐えた。住宅被害は甚大だったが、野々島に住む42世帯の全員が無事で犠牲者が出なかったことが何よりだった。

離島での生活では悪天候で海が荒れ、命綱の船便が欠航して食糧が届かなくなることもある。それに備えて各家庭ではかなりの量の食料品や生活必需品を大型の冷凍貯蔵庫などに蓄えている。その生活習慣が、避難生活の助けになった。避難所で３、４日経つうちに学校の米が底をつき始めると、避難者たちが口々に自宅に貯蔵してある食品を持ち寄って利用しようと言い出した。

食料品を取りに自宅に戻った人たちは、我が家の変わり果てた有様に呆然とした。とても住める状態ではないことは、すぐに理解できた。それでも、もみくちゃになった室内や自宅の周囲を探し回り、津波にさらわれずに助かった貯蔵庫のうち、蓋が開かずに助かった食糧をかき集めて飢えを凌ぐことにした。

貴重な食糧だから、順番を決めて利用することにし、みんなが一斉に蓋を開けないように、私は避難者たち全員に提案した。まだ寒い時期だったのが救いだった。夏だったら、中の食糧は腐敗して使いものにならなかっただろう。それでも、飲料水は不足気味で不安だった。

避難所での防寒対策も講じなければならなかった。家屋自体は津波による壊滅的な被害を受けたが、貯蔵庫のほかに利用できる状態で残っているストーブがあるかもしれない。これも住民の了解をとり、壊れずに残ったストーブを探しに居住地域へ下りて行った。なんとか使えそうなものを４、５台見つけ出して避難所に運び込んだ。

水洗トイレは、学校のプールにあった水をバケツに汲んで流した。洗いものも、プールの水で我慢した。背に腹は代えられなかった。

３月15日くらいであったか、岡山県の自衛隊がヘリコプターで飲料水とパンを届けてくれた。消防作業服の上から法被を纏った団員が、対岸の塩釜港へ小舟を操って救援物資を受け取りにも行った。

上空から見た野々桟橋。左上に見えるのが、島民が避難した浦戸諸島開発総合センター（３月16日撮影）

団員から次々に届く深刻な情報

宮城県東松島市消防団
団長　**阿部　賢一**（67歳）
消防団歴　36年（農業）

東松島市の概要と被害状況

東松島市は、宮城県の中部に位置し、「平成の大合併」における矢本町と鳴瀬町の合併によって平成17年４月に誕生した。石巻市、美里町、松島町に接している。南側は太平洋（石巻湾）に面し、鳴瀬川の河口にあたり、北上運河、東名運河も通じる。

市の総面積は101.86㎢、平成24年２月１日現在の人口が４万0,708人で世帯数は１万4,681世帯。災害発生直前の３月１日時点では4万3,142人、1万5,080世帯だった。災害の前後で2,434人399世帯が減少しているのは、生存者の中に市外に避難している家族がいるためだ。

東松島市消防団は、11分団から構成され、平成24年３月１日現在の団員数は644名で震災により、多くの消防車両も被災したが、その後寄贈を受け、普通積載車が32台、軽積載車３台、ポンプ自動車２台で活動している。

３月11日の大地震では、震度６強を観測した。人的被害は死者1,047人、行方不明者58人、負傷者121人、住家被害は全壊5,470棟、半壊5,427棟、となっている。

今回の活動記録は、団本部の記録と東名、大塚地区を管轄する第10分団の記録である。

犠牲者が集中した野蒜地区

東日本大震災発生から11カ月近く経った２月14日の時点で確認された東松島市全体の犠牲者は1,047人。その半数が東松島市の野蒜地区に集中していた。特に、被害が甚大であった亀岡部消防団詰所周辺は、震災から１カ月が経過しても通路をやっと確保できる状態であり、惨状の爪跡は残ったままだった。

指定避難所になっている野蒜小学校周辺は、津波に流された車両があちこちから押し寄せ、まるでスクラップ工場に積み上げられた廃車の山のような様相を呈していた。

３月11日、私は朝からビニールハウスの中でキュウリの栽培管理をしていた。午後４時に東松島市長と会う予定であったため、その準備のために自宅に戻った時、いままでに経験したことのない

犠牲者が集中した野蒜地区。３月12日撮影

海岸から１キロ離れ、市が想定した津波浸水域の外にあり避難場所指定になっていた野蒜小学校

避難した約350人のうち高齢者ら約40人が犠牲になった野蒜小学校体育館

激しい揺れに見舞われた。普段は妻と息子の３人暮らしだが、この日はたまたま嫁ぎ先から娘が孫２人を連れて里帰りしていた。

私は、消防活動服に着替え法被を纏いながら、家族に「すぐに避難の準備をしろ。情報をつかんだら連絡する」と注意を促して急いで市役所に向かおうとしているところへ、近所の団員が「大津波警報が出ている」と伝えにやってきた。私は、急いで高台にある妻の実家へ向かうように家族に指示し、３kmほど離れた市役所に車で急行した。庁舎内には、すでに災害対策本部が設置されていた。

指定避難所はすべて被災

ライフラインが途絶えてしまった。庁舎は非常用自家発電機が起動してテレビは映るようになった。そのテレビが伝えるニュースを頼りに情報収集にあたった。その一方で、石巻地区広域行政事務組合石巻消防本部や宮城県警察から、津波は牡鹿半島に到達したという連絡が入ってきた。15時20分ごろだったと記憶している。

「これは大変なことになる」

そう直感して、災害対策本部に顔を出していた団員たちには「住民たちに、すぐに高台に逃げるように伝えろ」と、早急に避難誘導を実施するよう指示を出した。

宮城県下では、昭和53年６月12日に発生した宮城県沖地震を教訓として、毎年６月に防災訓練を実施している。東松島市では参加者が指定された避難所に集合することになっている。

だが、私は、地震の直後に、「避難所へ」という言葉は口にしなかった。「なぜ、避難所ではなく高台なのか」と避難先の指示が腑に落ちなかった市民もいたようだ。しかし、後になって確認されたことだが、市内の沿岸部の指定された避難所は、すべて津波の被害を受けていた。

テレビ、ラジオからの情報や消防本部と警察からの情報を総合的に判断して、「この津波は尋常なものではない」と、直感した。だから、敢えて自分自身の責任で「避難所へ」ではなく、「高台へ」と指示したのだ。

津波の第１波が東松島市に到達したのは、地震発生から45分～50分後のことだ。この時、私は災害対策本部に詰めていたので、宮城県名取市や気仙沼市に津波が襲いかかる様子はテレビが映し出す画像で全て見ていた。この津波が東松山市の沿岸地域にも襲来したらどうなるのか、と想像して緊張が走った。

橋が崩れ孤立した宮戸地区

有事の際には、日ごろの訓練から各分団の代表が災害対策本部へ駆けつけることになっていたが、それすら叶わぬ分団もあった。車でたどり着こうと思ったが、道路が使えず、途中から歩いた

宮戸地区へ通じる唯一の橋が崩落

壊滅状態の大曲浜地区（３月14日撮影）

り、自転車に乗り換えたりしてたどり着いた団員もいた。津波の襲来で詰所周辺に立ち往生するしかない分団もあった。

団員たちから届けられる情報は、深刻なものばかりだった。大曲浜地区と野蒜新町地区は全滅した。宮戸地区へ通じる唯一の橋が崩壊し、孤立した。宮戸地区への接近は舟しかなかった。比較的被害の少なかった第10分団大塚部の団員に漁業用の小舟を使って状況把握に行ってもらった。

断片的な情報が届くだけで、市内全域の状況は全く手探り状態だった。深夜になって避難所の野蒜小学校にようやくたどり着いた消防本部の救急隊から、多くの犠牲者がいるという情報が入ってきた。

３月11日の19時ごろに小野地区の住民50人ほどが津波を避け、近くの山の麓辺りに避難しているという一報が私のもとに届けられた。何を差し置いても人命救助が最優先である。私は、すぐに救出班を編成し、すかさず市役所のマイクロバス１台を出してもらうように要請して、救出地点への急行を指示した。

しかし、二次災害はなんとしても避けなければならない。無理をせず安全な迂回ルートを通って、目的地へ向かうように救出班には伝えた。救出班は、目的地の背後にある滝山を越えて被災者たちの待つ地点まで、それ以上は車が通れなくなるぎりぎりのところまでマイクロバスを近づけた。そこから先は徒歩で、焚き火をしながら救出を待っていた方々と落ちあい、全員を無事にバスに誘導した。その後、この人たちを避難所になっている大塩市民センターに送り届けた。これが、東日本大震災で東松島市消防団が成し遂げた最初の救出劇だった。

辛かった遺体搬送の作業

一方、松島湾に面して建設された老人ホーム「不老園」では、多くの犠牲者がいるようだという情報がもたらされた。地震・津波の発生が昼間だったため、「不老園」には43人の入居者のほかに、30人を超えるデイサービスの利用者がいた。

その情報を聞いて、私は一刻も早く団員を現場に送り込むことを決断した。３月12日には遺体の仮安置所を市役所近くの体育館に定め、続いて津波による被害がなかった内陸部の分団を中心に遺体搬送班を編成した。遺体搬送というのは、消防団としては初めての任務であり、辛い作業だった。遺体を運ぶための軽トラックを調達して現場の「不老園」へ向かうよう指示した。

しかし、現場周辺はまだ水が引き切らず、瓦礫が行く手を阻んで「不老園」に近づくことすら困難を極めた。まず、瓦礫を撤去し、足場を固め、通路を確保することに多くの時間を費やした。遺体搬送班が実際に現場に足を踏み入れることができたのは、３月13日になってからだった。遺体を収容する際、持ち物などで必ず身元確認をすることも現場に向かう団員たちに徹底させた。

牛綱地区で人命救助する団員

山側から見た東松島市の被災状況（国土地理院）

被害規模が大きく、多くの犠牲者が出た野蒜地区での身元確認は、ほぼできた。遺体は次々に発見され、その収容に専従する遺体搬送班の作業は、３月いっぱい続いた。非常時に備え、市役所が保管していた毛布で遺体を包んだ。どの遺体も津波をかぶって泥まみれの姿で見つかった。団員たちは、遺体にまとわりついた泥を洗い流してから毛布に包んでいた。しかし、日が経つにつれて、泥を取り除こうとすると皮膚を痛めてしまうようになり、しかたなく泥がついたまま毛布で包んだ。団員の誰にとっても初めての体験だったし、困難で辛い作業の連続だった。

大曲浜地区を捜索する消防団員

後援会長の差し入れに感謝

３月12日には、一房のバナナが消防団に差し入れられた。そこにいた団員全員で分け合った。一本を何人かで分けたから、口に入ったのは本当にひとかけらだけだった。だがこれが、地震発生後に私が口にした初めての食事だった。そこで初めて、一滴の水ものどを通していないことに気付いた。飢えも渇きも感じることができていなかったのだ。

３月15日には、消防団の後援会長から「自宅で作ってきた」といって、おにぎりが届けられた。災害対策本部のメンバーも自分たちと同じように食事らしいものは口にしていないというので、みんなで分けた。これもまた、一人にひと口。本当においしかった。その状態を知った後援会長は、３月16日に、２倍のおにぎりを届けてくれた。しかもその差し入れを１週間以上も続けてくれた。本当に、本当にありがたかった。消防団ばかりでなく、災害対策本部の人たちも、「これで生き延びた」と、温かい気持ちになった。自宅の被害を免れた後援会長は、その様子を確認した後、「これが最後の差し入れだ」といって、つきたてのモチを届けてくれた。後援会長の応援は決して忘れられないものとなった。

津波に揉まれて遠ざかる人影

宮城県東松島市消防団
第10分団　分団長　**櫻井　光悦**（46歳）
消防団歴　26年（工務店経営）

水門に襲いかかる水の壁

東日本大震災が発生した３月11日は、自分の経営する工務店が請け負った仕事で７人の従業員とともに塩竈市の建設現場にいた。作業中に恐ろしい揺れを感じた。現場は山の上にあり、津波の被害が及ぶ心配はなかったので、従業員たちをその場に残し、第10分団長としての使命を果たすため、「すぐに戻らなければ……」と、車に飛び乗った。普段は20分の道のりが、帰路には倍の40分かかった。停電で信号が機能しなくなって交通渋滞にもなっていたが、何よりも道路自体が波打っており、危なくてスピードが出せなかった。

途中、やきもきしながら車内のラジオに耳を傾け、ハンドルを握っていた。震度も伝えていたと思うが、記憶に残っていなかった。ただ、大津波警報が出ていることだけは、はっきりと覚えている。やっとたどり着いた自宅の駐車場に家族用の車がなかったので、両親と妻、そして３人の子どもたちはすでに避難しているとわかり、近くにある消防団詰所に向かった。ポンプ車はすでに出動していた。

第10分団管内には水門が２基あり、津波注意報、警報が出たら最初に駆けつけた団員が水門を閉めに行く約束になっていた。私は、二宮団員と２人で水門を目指し、後を追った。先に来ていた斎藤団員が「１基は自家発電で閉め終わったが、海に近い奥のもう１基は電源が切れて閉まらない」と、大声で叫んでいた。「手動で閉めに行こう」と水門の方に向かおうとしたら、前方に真っ黒い水の壁が威圧するような勢いでこちらに迫ってくるのが目に入った。津波というよりは、まるで動く山並みのような不気味さを感じた。

浮き輪投げ、間一髪で救助

津波が押し寄せて来る前に、海辺の一帯でウミネコやカモメがただ事ではないように騒がしく鳴き喚めいていた。そんな記憶が残っている。それが、きっと津波が襲来する前兆だったに違いない。津波が来る前に、家という家から飼い猫が山をめがけて一斉に走り出した様子を目撃した団員もいた。「この辺りには、こんなに猫がいたのか」と、驚いた住民もいたそうだ。

後でわかったのだが、水門を閉めに行って逃げる機会を失った斎藤団員は、水門のてっぺんにしがみついて津波が収まるのをじっとこらえていたそうだ。その水門をめがけて津波で流された漁船がぶつかってきた。すぐ下を、さまざまな漂流物が波に揉まれていた。斎藤団員は生きた心地がしなかったそうだが、奇跡的に助かった。

斎藤団員に救助の手を差し伸べることができないまま、私は近くにあった漁協ビルの２階にあわてて駆け上がった。バルコニーから外を見ると、

津波に飲み込まれて目の前を流れていく何人もの姿が見えた。そこに集まっていた人たちで手をのばし、衣服の背中をわしづかみにして２人を助け上げた。しかし、助けられずに津波に揉まれて遠ざかって行く人が数知れずいた。車内に人影が見える車も流されていた。現実とは思えないような光景が目の前で起こっていた。

脇の方で「助けてぇー」という叫び声が聞こえた。年配の女性が漁協ビルのトイレの換気口につかまっているのが見えた。なんとか救助したいと腕を精一杯伸ばしたが、そこまでは届かない。何とかならないかと思っていたら、たまたま漁船がすぐそばを流れてきた。船腹についていた浮き輪を外して女性に投げ渡し、つかまらせた。浮き輪に結び付けてあったロープを手繰り寄せ、引っ張ってきた。女性を励まし、自分のズボンのベルトにつかまらせようとした。しかし、女性は手を伸ばしたものの、握り締めるだけの握力もなくなっているくらいに疲れ果てているように見えた。

津波は、少しずつ引き始めていた。私は、女性を助けようと、階下に降りた。１階の事務机や椅子、書類棚は、竜巻に巻き込まれたようにひっくり返っていた。流入した泥水が、渦巻きながら通り抜けて行った様子が読み取れた。水圧で閉まったのか、入口のドアは、鍵がかかったようになっていた。そのドアをこじ開けて外へ飛び出し、女性のところへ近づいた。

女性は、リュックを背負い、バッグ二つをきつく握り締めたまま呆然としていた。大切なものをまとめ、避難する途中だったようだ。水位はかなり下がっていたが、腰のあたりまで濁流に浸かったままだった。暴走する濁流の中をさまざまな瓦礫が私の体にぶつかりながら、流れ去っていった。

松島湾へ通り抜けた暴れ津波

女性の腕をつかんで漁協ビルの中に荒っぽく引っ張り込んだ。乱暴なしぐさをちょっと反省したが、実際には丁寧に対応しているゆとりなどはなかった。私自身も助けた女性もずぶぬれだった。どこかに毛布はないかとあたりを見回すと、近くに全壊状態の民家が目に入った。「あそこには毛布があるかもしれない」と近づいたが、誰も居る気配はない。中に入ろうとしたが、根こそぎ押し流された防風林の松の幹などの流木が玄関に突き刺さって入口を塞いでいた。

津波は、東名地区で暴れまくって松島湾にストンと抜けて行ってしまった。津波は、寄せてから引いていくという濁流の往復の動きがあるのが普通だ。しかし、私の記憶では、この地区では濁流は一方通行で流れ去り、引き波という現象は観察されなかった。

漁協ビルには、二宮団員も避難して来ていた。水門にしがみついていた斎藤団員も、津波の襲来から５時間くらい経ってから、命からがら漁協ビルにたどり着いた。３人はお互いに顔を見合わせて、「てっきり死んだと思い込んでいた」と言いながら、再会にとりあえず安堵した。

漁協ビルには、私たち３人の団員のほかに60人くらいが集まっていた。津波が来る前にあわてて避難してきた人もいれば、津波に飲み込まれて助けを求め、たどり着いた人もいた。一階はすっかり水没したので、みんな２階に上がっていた。

寒さが身にしみた。漁協ビルには船上作業用の合羽があったので、それを着込んで寒さをしのいだ。全員には行き渡らなかったので、足りない分は室内にあった段ボールを利用して体に巻きつけて我慢してもらった。

瓦礫踏み分け安否確認へ

夜明けを待ち、私たち団員３人は、周辺住民の安否確認のために外へ出た。残りの避難者たちには、そのまま留まるように指示した。外へ出ると、見渡す限り、爆撃を受けたような惨状だった。どこが道路なのか、全く見当がつかないくらいに瓦礫が散乱し、歩こうにも歩けない。瓦礫の

山を踏み分けながら、進んだ。普段なら、15分ほどで歩ける距離を、何時間もかけなければならなかった。

途中、形骸を残している家屋には２階に避難している人がいるかどうか、声をかけながら、指定された避難所を目指した。やっと辿り着いた避難所では、何人もの人たちが横たわったまま息絶えていた。亡くなった人の多くは、高齢者だった。寒さに耐えきれなかったのだろう、やりきれない気持ちになった。

避難所へ向かう途中の山道で亡くなっている人もいた。「野外にこのまま放置するのは忍びない」といっても、運ぶための消防車両も自分たちの私用車もすべて津波にさらわれた。災害対策本部を介して、津波被害を受けなかった地区から、犠牲者の搬送用車両を融通してもらうことにした。その車両も、瓦礫に遮られた道路を進まなければならないので狭い道を動ける軽トラックが必要だった。

集められる限りの消防団員をこの避難所に結集させた。なんとか軽トラックを回してもらえたが、小さな荷台なので一度に運べる遺体は２体までだった。できるだけ迅速に作業を進めたいが、団員同士の連絡もままならない。携帯電話も使えず、人づてに声を掛け合いながら集まってもらうしか手段がなかった。自宅を失い、瓦礫に行く手を阻まれて身動きが取れず、２日間もかけてようやく集合場所にたどり着いた団員もいた。結局、揃ったのは普段の半数ほどの16名に留まり、搬送作業は難渋した。

難渋した身元の確認作業

２人一組で８班を編成し、犠牲者の捜索グループと搬送グループに分けた。団員たちが見つけ出してきた犠牲者の遺体を、私は一人ずつ丹念に身元確認してから収容した。消防団歴26年の私は、地元の人たちのこともよく知っていたし、地元の区長たちも避難所を回って行方不明者の聞き取り調査を実施して、その名簿を私に手渡してくれた。

それでも、２週間目ごろに発見された高齢者の遺体があまりにも変わり果てていたために、身元を間違えてしまったことがあった。そこで、普段から親しく付き合っている人たちに確認作業に協力してもらうことにした。確認作業は、避難所近くの道路脇にテントを張って、そこで実施した。吹きさらしで、寒かった。瓦礫に混ざって転がっていたガスストーブやガスボンベを利用して、手を温めた。

運び込まれた遺体の中に、苦労を共にした仲間の団員を発見した。「犠牲になった団員が営んでいたコンビニエンスストアはかろうじて原形をとどめていたのに」と思うと胸が詰まった。その団員の弟が避難所にいたので、事情を理解してもらい、店内に残っている商品を提供してもらった。３月13日のことだった。ペットボトルの飲料水をガスストーブで沸かしてカップ麺などを食べた。東日本大震災の発生後に口にした初めての食事だった。参集した他の団員たちはいずれも自宅は被災を免れたので、日が暮れたら帰宅してもらった。

我が家は、１階部分を津波が突き抜けた。２階は残ったものの、とても住める状態ではなく全壊状態だ。私が家族の無事を確認できたのは、１週間後のことだった。親戚の家を転々として、全員が顔を合わせたのは、被災から３週間後のことだった。両親は親戚に身を寄せたままだが、私と妻、そして子どもたちの５人は６畳と４畳半のアパートで仮住まいを続けることになった。工務店の事業も３週間後から再開した。

東松島市消防団員８名が、この東日本大震災で殉職した。いずれも市民の生命と財産を守るために活動していたかけがえのない仲間たちだった。

水門を閉めた、遺体も運んだ、全力で消防団は対応した

宮城県七ヶ浜町消防団
副団長　氏家　　進（63歳）
消防団歴　34年（会社員）

七ヶ浜町の概要と被害状況

七ヶ浜町は、宮城県の中心部仙台市の東側（仙台市中心部から東に約20㎞）に位置し、周囲27.8㎞で、南は太平洋に面し、北と東は松島湾と三方を海に囲まれ、西は仙台市、多賀城市、塩竈市と隣接する、松島湾の南西に突き出した方形に近い半島状の形態をなしている。町の総面積は13.27㎢（県内最小の町）、人口は２万0,201人、世帯数は6,447世帯（平成24年３月１日現在）である。大部分の地域が海に望み海洋性気候のため、仙台市と比較して夏は２度～３度涼しく、冬は暖かい。また、降水（雪）量が少ない。

七ヶ浜町消防団は、10分団から構成され、団員数は223名である。このうち、女性団員が18名いる。また、消防ポンプ自動車が10台配備されている。

３月11日の大地震では、七ヶ浜町の東宮浜で５強を観測した。七ヶ浜町の人的被害は死者72人、行方不明者４人、負傷者不明、住家被害は全壊673棟、半壊635棟となっている。

今回の活動記録は、団本部と菖蒲田浜地区を担当する第２分団である。

地震直後に水門閉鎖と津波の広報

多賀城ジャスコ西側の臨海鉄道の側に、私が経営している会社があり、当日はその会社内で地震にあった。これは尋常な揺れではないと思った。揺れの時間が長かったので、しばらくは社内にいたが、外へ出たら会社の真正面にある東北電力の高圧線の揺れがすごかった。

社員は私が消防団副団長をやっていることを知っているので、津波警報を聞いて、「社長、消防に行かなくていいんですか？」と言われ、会社を部下にまかせて消防団に向かった。町役場に着いたのが15時半ごろで、地震発生から約１時間が経っていた。町役場には、町の防災担当者や消防署の方が集まっていた。その時はまだ津波は来ていなかった。緊急時は団長、副団長は町役場に来ることになっている。また、各分団は水門閉鎖と津波の広報をすることになっており、私が着いた時には消防署の職員や防災担当者が、分団へすでにその指示を出していた。なお、町内の水門は、自動的に閉まる水門は一箇所だけで、他は手動で行っている。

津波の襲来とともに分団の無線が途絶えた

各分団への連絡は防災行政無線で行われており、各分団へのいろいろな指示もすんなり行ったと思う。ただ、分団によって、地元にいる人数が多い分団と少ない分団があるので、分団によって出動態勢に隔たりがあったと思う。その後、津波

が来たと同時に、海岸地域の分団の無線が途絶えた。これは、ポンプ車ごと無線が流されてしまったためで、第１分団の部長が犠牲になった。この分団は、広報、避難誘導を一度終えて、一旦、ポンプ車置き場に戻ったようだ。ポンプ車置き場が少し高い所にあるので、そこまで津波が来ると思わなかったようだ。また、第２分団のポンプ車も津波に巻き込まれており、避難誘導の途中で津波が来てしまい、高台に避難したが、その逃げた高台にも津波が来てしまった。確か、その場所が第二分団の担当地域の避難場所で、そこへは住民、高齢者も避難していた。ポンプ車が流されたくらいなので、住民も流されたと思う。なお、ポンプ車置き場に向かう途中で流された団員もいた。また、第１、２、３、４、７、８分団の団員の多くが津波で自宅に被害があり、特に、第１、２、３、８分団の団員の中には、完全に家が流された者や家族を亡くした者がいる。

JX日鉱日石エネルギー仙台製油所タンクが爆発！　緊張が走る

避難の呼びかけで、住民のほとんどは避難したと思う。しかし、高台に逃げながら流されてしまった者が多かった。昔からの言い伝えで、ここへ逃げなさいという所へは逃げたが、それよりも津波が超えてしまったということだと思う。町には16時ごろ津波が来て、汐見台の道路が全部冠水した。私も、もう10分、町役場に来るのが遅かったら津波に巻き込まれていたかと思う。その後、暗くなってきたし、津波も第２波、第３波と何度も来ていたので、とにかく消防団も退避しなさいということになった。暗くて捜索活動などできなかった。

団本部でいろいろ情報収集をして、それを消防署と役場で共有していた。団への連絡は、無線が生きているところは無線で行った。第３分団は無線で連絡が取れたが、第１、２分団は、流されたポンプ車の無線はダメになっていて、携帯電話も繋がらないため連絡が取れなかった。伝令を飛ばそうとしても、団員は各分団のポンプ車置き場にいて、団本部にいたのが団長、副団長、消防職員、町役場の担当の人しかいなかったため、人手に余裕がなかった。

なお、分団の連絡手段は、ポンプ車についている無線の他に、携帯できるトランシーバーがある。それは、分団同士のやり取り用に使用している。ただ、団本部とも繋げることは出来るので、そちらとのやりとりにも使っていた。

夜になり、助けを求める人が何人かいた。たまたま、私の携帯電話が使えて、分団から救助要請の連絡が入ってきた。乳飲み子と２、３歳の子を連れたお母さんが流されていて、田んぼの中のトマトハウスの近くの倉庫で助けを求めているので何とかしてほしいという連絡だった。地区の責任者と連絡を取り合って、救助をしようとした。当初、船を出してくれと言ったが、瓦礫はすごいし、船自体が流されてないので、ゴムボートで助けようと連絡していた。当日は、目に見えるものしか助けられなかった。

当日の22時か22時30分に、JX日鉱日石エネルギー仙台製油所の重油かコールタールが入ったタンクや周辺の貨車が爆発した。JXの所長が町役場へ来て、状況の説明と住民を避難させるように要請をしていた。そのため、JXから半径２㎞圏内の津波の被害にはあっていない湊浜地区と松ヶ浜地区の一部に避難命令が出て、町役場から防災行政無線で広報した。また、遠山地区の一部も学校へ避難させた。松ケ浜小学校には、すでに第１分団のエリアで津波の被害にあった人たちが避難していたが、そこへ被害のなかった湊浜地区、松ヶ浜地区の人たちも避難してきた。津波で流された人たちと、爆発から逃れる人たちが合流したので、とんでもない人数になり、避難所に入りきれないので、みんな校庭に車を並べて、一晩を過ごした。JXの爆発で避難した地区は高台で、津波にはやられていない地区だったが、避難のために、わざわざ津波の危険がある方向へ避難しなければならなくなったため、心配があった。そのた

め、私は町役場から抜け出し、地区でどのくらいの人が避難しているかを小学校へ確認しに行った

その後、団本部からの指示もあまりなく、入ってくる情報に対しての返答だけが仕事になったので、消防署にそれを任せて、爆発からの避難誘導をするため、当該地区へ行った。だいぶ海水も引いたので、通れる道を通って自宅の方面へ行ってみた。自宅の周りの担当の第６分団と合流し、近所の住民の避難誘導をした。避難先の小学校は海の方の高台にあり、そこは絶対安全という場所だが、爆発から避難してきた人たちは全員、校庭の車の中で過ごした。

JX火災の爆発の音が、朝まで続いていた。煙が北西から吹いてくる風に乗って、町内で津波の被害を受けた菖蒲田浜地区や松ヶ浜地区、湊浜地区の方へ低く流れていった。朝になっても煙幕が張られたような感じで、炎や煙で喉がヒリヒリした。

また、携帯電話がたまたま繋がると、多賀城市のどこに人が取り残されている、といった情報が入ってきた。そのため、町役場の電話で県と連絡を取り、直接、県からどこそこへ救助隊を派遣してほしいなどの要請をしていた。また、地震当日、救急車が来ないので、ケガ人を消防団で搬送した。なお、第１分団の部長が怪我で亡くなっており、その遺体も搬送している。

地震発生２日目朝から災害対応

３月12日の朝６時にミーティングがあり、その結果、10分団すべての団員を、被害の一番大きかった菖蒲田浜地区へ朝７時に集結させた。まず、現場の現状を確認するということだった。まだ、自衛隊はわずかしか来ていなかったし、警察も来ていなかったと思う。被災した分団を核として、被災していない分団をそこに付け、捜索活動をはじめた。一番気を付けたのは、二次被害のないようにすることで、瓦礫の山の中で、釘の踏み抜きを含め、ケガのないようにという指示をして、各地区の生存者の救出と遺体の確認をさせた。なお、被災地の第１、２分団のポンプ車が損壊したため、６、10分団のポンプ車を現場の指揮車とした。

生存者のほとんどが避難していたが、２日目に30歳代後半の女性が１人、被災現場で発見された。雪が降って寒かったので、よく二晩耐えたなと思い、発見した時はうれしかった。しかし、２日目からはほとんどが遺体捜索で、発見して引き上げた遺体を警察の鑑識の人と私、地元の人と一緒に身元確認した。その遺体は一時的に町役場の母子センターに安置した。後になってからは利府町の遺体安置所に直接運ぶようになったが、その当時はとりあえず、そこに運んでいた。遺体は団員も運んだし、消防署も運んだし、自衛隊も手伝ってくれた。

団の活動は、しばらくの間、遺体捜索が主であった。発見されると、どのような人がどこで見つかったのか連絡を受け、それをどこに収容するかなどの指示をしたり、町役場へ確認したりしていた。

14日月曜日の22時ごろまで現場指揮をした。その後、どうしても連絡が取れない社員が一人いると聞き、会社に行った。自分はどうしても消防団を離れられないので、自分の代わりに指揮をしてくれと頼んでいた。その後は、日中は消防団にいて、夜に会社に行くようになった。結局、行方不明だった社員は亡くなっていた。震災翌日には遺体が上がって、利府町の遺体安置所に安置されていた。そこまで連絡に時間がかかったのは、遺体安置所が相当混乱していたためのようだ。

毎日朝と夜に町役場に関係者が全員集まった。町役場の担当者が、それぞれの課ごとの報告を行い、それに消防団が加わり、毎回、活動の指示があった。朝は必ず６時50分に今日の活動計画を話し合って、７時半に団員を集めて指示をした。消防署、警察、自衛隊の方々はエリアを分けて捜索をやっているが、応援に来た人は、地元のことがわからないので、各分団がそれぞれに付いて、案内をしていた。自衛隊は多賀城から来ていたが、応援の消防隊はいろいろな地域から来ており、その都度、地元の分団と組んで活動をしていた。

５日目にJXの火災の避難解除があった。なお、

３月中に１件火災があったが、通常の対応をした。10日位過ぎてくると、津波被災地ではない地域のブロック塀が危険な状態になっているのに気付いた。その地域の分団はブロック塀を壊し、撤去する活動をすることになり、その指示を出していた。

津波の被災地区の消防団では生存者の安否確認、遺体捜索・搬送、瓦礫の撤去、夜の防犯活動を行い、津波の来ていない地区では巡回活動をしていた。地震後２日目あたりに、津波で流された場所で花火を上げた者がおり、また、JXの件でみんな避難しているはずなのに見知らぬ車がいたりして、地区が誰もいなくなって無防備なので、防犯活動をしていた。

各分団員へは、主に町役場から、避難している人たちと一緒の食物、飲料水が支給された。ポンプ車と活動に必要な燃料の確保は大変で、町役場から給油所を指定され、そこで給油したり、町役場が直接、用意してくれたりした。とにかく、燃料確保が大変だったが、燃料が足りなくて活動停止になることはなかった。

その後、団員が職場復帰しないといけない時期になったため、遺体捜索の第一段階の区切りを付けたのが３月25、26日ごろ、次が３月の末、その後が４月20日ごろだった。しかし、団員の家族の遺体が上がっていなかったので、捜索活動は一部で続けていた。消防団としての捜索活動は５月の連休明けに終了し、あとは自衛隊にお願いした。電気が３月末ごろ復旧して、上水道が４月の始めごろ通じた時はほっとした。

津波警報がオオカミ少年になってしまった

災害当日、津波が来た時は、町役場内の会議室に詰めていたので、直接津波は見ていない。消防署の下まで津波が来たと聞いてびっくりした。自分は小学５年生の時にチリ地震津波を経験しているので、津波が怖いという意識はあったが、それをはるかに凌いだものだった。津波は入り江で大きく来るもので、平らな海岸、砂浜にはあまり来ないと思っていた。ところが、今回は、砂浜も何も関係なく大きい津波が来たので、津波に対する啓蒙をもっとするべきだと思った。また、津波注意報は出るが、大きな津波が来ないため、オオカミ少年のようになってしまっていたのも影響した。

平成22年の８月ごろ、広報・情報連絡の訓練をしようということで、実際に状況を想定して、ポンプ車の無線と自分たちが渡されている携帯無線を使って、無線の使い方、無線でのやりとりの言葉の使い方などを訓練していたので、それが役に立ったような気がする。また、平成22年のチリ地震津波もあったし、今回の地震の前には防災訓練を行っており、給水訓練や町長を含めた地域防災の会議もやっているようなので、住民への啓蒙は徹底されており、住民の意識も高いと思う。

団員の精神的ケアの継続を希望

今後見直すべき点として、ポンプ車の被災を避ける対策を考える必要がある。火事を想定して、人の多い場所に詰所を置いていたため、今回は津波で被災してしまった。この反省から、ポンプ車は高台に置くべきだということになった。その他の装備に関しては、特に要望はない。なお、水や食料も必要になるが、まず必要だったのは、燃料である。ガソリン、軽油などをもっときちんと確保できていれば、活動ももう少し違ったのかとも思う。さらに、被災した団員などのケアや、ケアまで行かなくとも日頃の精神的な癒しというものが必要と思う。

他の地域からの支援が来るまで、消防団が中心になって活動していたが、その間、団員は自分の家族や自分のことはほとんど何もしていなかった。自分が消防団にいる間は、大きな災害が起こってほしくないと思っていたが、いざ、このような経験をすると、今後どのようなことが起こっても、びくともしないと思っている。また、今回の活動を見て、自分も消防団に入りたいという若者が増えるのではないかと希望を持っている。

ボウッと迫ってきたのは、海や家や瓦礫だった

宮城県七ヶ浜町消防団
第２分団　分団長　**渡邉　留四郎**（63歳）
消防団歴　24年（会社員）

参集後すぐに避難を呼びかける

地元の建設会社に勤めており、地震発生時には、町内の火力発電所の工事現場にいた。最初、緊急の電話が鳴り、発電所の中で何かあったのかと思ったが、その後に揺れ始め、車にすがって重心を取らなければならないほどの揺れになった。一旦、揺れが収まったので、車に乗ろうとしたが、また大きく揺れた。

消防団では、震度４でポンプ小屋に待機することになっていたので、すぐに車で火力発電所から２㎞位の場所にあるポンプ小屋に向かった。ポンプ小屋のすぐそばに車を置いたが、そこで団員から津波警報が出ていると聞いた。水門は遠隔操作でも閉鎖できるが、その時は、団員５、６名がすぐに海岸に行って手動で水門操作をしていた。

14時55分位、私も水門まで行って、津波警報が出ているのですぐに避難するように言った。その後、水門から２㎞位の区間の海岸線を、避難広報を行った。その時、海の状態を見ながら広報していたが、あまり変化しているようには見えなかった。高台から海岸に出て、海を見に来ている人もいたので、避難するように言って回った。また、町の防災行政無線でも避難するように言っていた。

間に合わなかった酸素ボンベ、活動の限界を感じる

一通り広報を行ったが、まだ海を見ている人が何人かいたので、もう一度広報しようということで、始めの場所に戻った。すると、海がボウッと膨れてきて、これは危ないということで、すぐに菖蒲田地区にある10箇所くらいの避難場所のひとつに向かった。ここは、当時居た場所から一番近くて、周りが見える高台の所だった。我々のポンプ車は、避難する人の一番後ろに控えていた。そこは車で２、３分の場所だが、そこに着いた途端に、下の方から家がボウッと持ち上がって来て、あっという間にその避難場所を飛び越えて行った。そこには、50人～60人位が避難しており、車で避難した人もいた。波に流されて、高齢者が崖の下に落ちたり、波と一緒に流されていってしまった人がいた。津波が来る前、寒かったので、車の中で暖を取りながら待っていた人たちが何人かいて、そのような車が並び、ポンプ車が一番後ろになっていた。避難していた車は、道路に傾斜があったので、そのまま引き波で海の方へ波に流されそうになったが、運よく最後に位置していたポンプ車が真横になり道を塞いだため、ポンプ車が壁のようになり、上から流されてきた車や人がそこで止まった。しかし、流された車や瓦礫に挟まれた人もいた。

津波に流された人や瓦礫に挟まれた人は、出来る限り救助したが、瓦礫は手ではどかせないので、木を挟んで、てこの原理で持ち上げようとしたり、他の者が足をひっぱったりして救助活動を行った。それでも、一人は助けられても、その隣にいる人を助けられなかったりして、悔しい思いだった。

避難場所から少し離れた高台の公民館も津波に襲われており、そこでも３人ほど亡くなった。その後、もう少し高台に避難したが、高齢者にケガをした人がいたので、高台の被害の無かった民家５、６軒に、私と地元の議員さんが、暖を取るためにも家に入れてもらうようお願いし、みんな、快く入れてくれた。しかし、避難した人の中には、寒さからか２人ほどが朝までに亡くなってしまった。消防団の若い者に瓦礫を集めさせて、近くの畑で火を焚いて一晩過ごした。震災当日は、８人くらい亡くなり、次の朝に２、３人が崖の下などで亡くなっているのが見えた。その後、住民のうち、健常な人は避難所へ行ったが、小学校が一杯になったので、中央公民館へピストン輸送したそうだ。

周りは瓦礫でいっぱいで、海に近いところは水が引かないので、どうしようと思っていた。また、ＪＸの火災で、黒い煙がもうもうと来て、爆発の音も聞こえており、食糧も何もなく、寒さもひどく、このまま孤立したら大変だということになり、夜０時になったら町役場に歩いてでも行こうということになった。夜中０時に、私が３名ほど団員を連れて家の軒下や瓦礫を超えながら、とりあえず近くの小学校に向かった。この小学校の近くに運よく町役場の車が居たので、自分たちが避難している場所や100人近くが孤立していること、連絡も取れない状態だという事を話した。また、酸素吸入を使っている人がおり、それが無くなりそうなので、消防署から酸素を持ってきてもらうことになったが、結局、間に合わなかった。食糧も無いことも伝えて、午前２時に再びそこで会う約束をした。その後、午前２時に食物をもらい、避難している人のうちで、ケガ人と高齢者の人数を伝えた。

七ヶ浜町は消防団が10分団あるが、消防団本部から連絡を取ってくれて、被害のなかった第２分団が手伝いに来てくれた。それで、高齢者やケガ人を運び出す作業をした。担架がないので、近くの公民館からテーブルを持ってきて、毛布を敷き、担架代わりにした。朝から昼まで、半日くらいかかって20人～30人位を運んだ。

また、地元住民から消防団にいろいろと捜索依頼が来ていた。次の日に、捜索を依頼された人の自宅に行ったが、持ち主が家の下で亡くなっていたり、２階に避難して助かったりしていた。団員の自宅で、家が潰れていて、母がここにいるかもしれない、妹も見つからないということで、捜索を行った。消防署の人にも来てもらったが、２日目は見つからなかった。３日目も捜索を続けたが、見つからないので、他の場所の捜索に移ったが、団員の一人が、もう一度さっきの場所を捜索したいと言ったので、15時過ぎに戻ったところ、声がする、ということになり、探そうとしたが道具がないので、長野県の緊急消防援助隊や自衛隊の人に来てもらった。すると潰れた家の中から妹さんが48時間ぶりで救出された。

震災３日目、ようやく本格的な捜査活動始まる

２日目の午後に、団員がポンプ小屋に集まり、まず家族と連絡を取れる者は取って、自分の身の回りの状況を確認するように指示した。その日は行動を起こさず、今後の行動範囲などの話し合いをし、バラバラにならないように行動しようということになった。団員は一睡もしていなかったし、いろいろあったので、午後からは休息をとった。この頃には、団員全員が集まっていたが、殉職者やケガ人はいなかった。車で流されて、運よく電柱にぶつかって、電柱に登って助かった団員もいた。分団の団員は24名いるが、家がなくなったのが18名で、家族や親戚を亡くした者もいた。

分団のポンプ小屋は水をかぶってしまったが、不思議なことに、窓ガラスは割れたものの、ポンプ小屋の中には瓦礫がほとんど入らなかった。そこでポンプ小屋の２階を拠点にして団本部と連絡を取り合ったり、打合せをしようということになった。家がなくなってしまった者も多いので、ポンプ小屋で寝泊りすることになった。

３日目になり、本格的な捜索活動が始まった。当初、遺体は、上から見て何体かは見えたが、２日目の時点では警察の検視があるまで、そのままにするように言われた。消防団が出来る範囲での捜索をしたり、消防団本部と連絡を取ったりしていたが、団には連絡手段がないので、町役場が他の地区の分団の団員を伝令として派遣してくれた。何日後かには無線が配布されて、交信できるようになった。

その後は、自衛隊やいろいろな地方の緊急消防援助隊などが入ってきたが、消防団はそれぞれの地区で被害を受けているので、自分の地区の捜索をした。行方不明者が、だいたいこの辺りにいるのではないかという時は、瓦礫をどかしたり、家の中に入って捜索はしたが、二次災害を心配して、無理はさせなかった。また、心当たりのある場所があれば自衛隊に連絡し、捜索をしてもらった。

また、３月いっぱいまでは、地区内に他の者が入らないように警備をしたり、避難所の小学校へ行く人の誘導など、地元に関係のない人が地区に入らないようにする活動を続けた。夜、不審な車が７、８台が停まっていたりするので、警ら活動もした。

捜索解除後も祈る思いで５月中旬まで活動を継続

３月いっぱいは20名くらいで捜索活動を行った。４月からは団員の仕事が始まったので、平日は７、８名で活動しているが、土日は団員全員が集まって活動していた。また、校庭の夜警も雨や

家が流され土台だけが残った

雪の日以外は毎日やっていた。４月11日に捜索解除になるまでは、会社がなくなってしまった４、５名を中心に、ポンプ小屋に寝泊まりして活動していた。なお、第２分団の３分の２は仮設住宅におり、他の団員は、仕事の関係や家族が多くて仮設住宅では狭いのでアパートを借りたりしているが、いつでも連絡は取れるようにしている。その後も５月の中ごろまで活動してくれた。

捜索中、釘を踏んでケガしたり、手を切った程度のケガをした団員はいたが、大きく体調を崩した者はいなかった。また、団員の飲み物や食べ物は、町役場からもらったり、団員の会社が心配して、東京などから飲料水をわざわざ持ってきてくれた。また、防火水槽もそばにあるので、トイレの水はそこから汲んだ。燃料は、ガソリンスタンドが優先的に消防団に給油してくれるので、指定されたスタンドに取りに行った。一日40ℓ程を、一週間から10日ほど続けて給油してもらった。

平成22年のチリ地震津波や３月９日の地震の時も津波警報・注意報が出ていたので、消防団本部から指示で、警報が解除になるまで海岸で待機していた。我々は震度４以上の地震があったら、動ける者はポンプ小屋に行って指示を待つということが頭に入っているので、自然と動いた。私自身は小学校６年生のとき、昭和35年のチリ地震津波を経験しており、津波は一回引いて、その後来ると思っていたが、今回、ある程度引いているのはわかったが、それほど大きくは感じなかった。

七ヶ浜町には13の行政区あるが、すべての地区

で自主防災組織が組織されており、年に一度は各地区の特性に合った防災訓練をしている。菖蒲田地区は海が近いので、すぐに指定された避難場所に避難するようになっている。また、地区ごとに要援護者の名簿を提出している。さらに、消防署の指導の下、消火器の使い方や、炊き出しの仕方、火災の時の対応などの訓練を毎年11月に実施している。高台への避難路も、自主防災組織で毎年点検をして、不備なところは自主防災組織の費用で直したり、町に要望して直してもらったりしている。消防団は自主防災組織とメンバーや活動は重なっていないが、自主防災組織の訓練には参加しており、指導などをしている。

なぜこれ程の犠牲者が

地域の住民はほとんどが逃げたが、近年、津波が来る来ると言っては来ないことが続いたので、年配の人の中には、逃げないで亡くなった人が何人かいた。また、地震から津波まで１時間位あったので、寒くてストーブを取りに行って流された人もいた。住民は、車で避難した者が多く、高台や中央公民館まで車で避難する者もいた。高齢者には歩いて避難した者もいたが、車を出せる人は高齢者を乗せて避難していた。私が最初に避難した高台でも、見た限りでは車が10台位あって、その中の３台位は車の中で人が待機していた。

津波で流された車にぶつかって亡くなった人もいた。また、２階にいたが、津波にびっくりして窓から飛び出し、瓦礫にぶつかって亡くなった女性がいたそうだ。消防団の管轄地域で亡くなった33人の中でも、避難したが津波に巻き込まれたり、避難所で亡くなったりした人が10人程いた。また、津波警報が出ている時、海を見ていた住民が何人かいて、その人たちは助からなかった。その中には、地元のベテラン漁師がおり、津波が来て、あわてて民家の２階に逃げたようだが、数日後その家に行って見てみると、上着を脱いで肌着一つで毛布をかぶって亡くなっていたそうだ。

今回は津波が来るまで時間があったので、大きい船を持っている人は沖出しをした。沖出しをした人の話だと、この世の終わりかというくらいの波だったそうだ。しかし、沖出しをしたが３日位は帰ってこられず、流れてきたカップラーメンなどをすくって、お湯を沸かして食いつないだらしい。さらに、海岸にはものすごい数のコンテナが流れてきており、そのうちの何個かは爆発したり、燃えたりしていた。消防団本部に連絡すると、中に入っている可燃物が燃えているということだった。

女性消防団員と一緒に完全復興に向けて邁進したい

第２分団管轄の菖蒲田地区には女性消防団員が２名いるが、地震当時、１名がすぐ来てくれて、ポンプ車で一緒に広報して回った。その団員は、津波で瓦礫に挟まれて足の骨を折り、入院した。女性消防団員は、本部付けにはなっているが、活動は男性と変わらない。団員数は17、18名で、各地区に２名位ずつ居る。火事など現場に行くことはあまりないが、訓練や行事には参加している。私の分団では、ポンプ車に乗って、広報をしている。女性消防団発足から10年ほどだが、うちの地区は５、６年前から、女性といっても同じ消防団の仲間だし、我々にできないこともいっぱいあるからということで、行事があれば来てもらっている。他の地区も我々に見習って一緒に行動するところも増えてきている。また、女性消防団員も、独自に消防署員と一緒に各家庭を回って、災害時要援護者の把握や、消火器の設置啓蒙などの活動をしている。

大雨は頭に入っているが津波は考えていなかった

宮城県多賀城市消防団
第５分団　分団長　**赤間　高雄**（63歳）
消防団歴　32年（造園業）

多賀城市の概要と被災状況

多賀城市は、宮城県の東部太平洋岸に近く、仙台市、塩竈市、利府町、七ヶ浜町に隣接する。市域は東西7.8㎞、南北4.2㎞で、市の総面積は19.65㎢、人口は62,780人（2011年２月末現在）、世帯数は２万4,733世帯（平成23年２月末現在）である。気候は、年間を通じて比較的温暖である。土地はおおむね平坦で東南に向かって平野が開け、仙台湾に面し工場地帯を形成している。東北部は丘陵性の高台で住宅地になっている。

３月11日の大地震では、多賀城市の中央で５強（平成23年６月23日気象庁発表）を観測した。人的被害は、死者188人、行方不明者１人、負傷者不明である。住家被害は、全壊1,730棟、半壊3,605棟である。

多賀城市消防団の概要

多賀城市消防団は、８分団から構成され、団員数は185名である。消防ポンプ自動車が８台配備されている。今回の活動記録は、被害が大きかった市中心部の第５分団と第６分団である。

避難誘導できる状況ではなかった

当日は、12時半頃に仙台の現場仕事が終わって、自宅の車庫に戻って片付けしていた時、地震にあった。とにかく消防団に行かなければならないと思い、地震が収まってから、職人に後片づけを頼んで家に帰り、活動服を着てヘルメットをかぶり支度をして、ポンプ小屋へ行った。10分くらいでポンプ小屋に着いたが、すでに団員は５、６名が集まっていた。その後、桜木地区に広報のためポンプ車を出した。ポンプ車には４、５名乗り、私を含めて残りの団員がポンプ小屋に待機した。

地震後、すぐラジオをつけたので、大津波警報はラジオから聞いた。最初は、津波、津波と騒いでいて、それから大津波となっていた。どれぐらいの大津波なのか、見当もつかなかったが、せいぜい港で２ｍ～３ｍぐらいかと思った。その後、40分くらい経ってから津波が来た。津波が来る様子は、ポンプ小屋で見ていたが、最初は、津波だとみんなが騒いでいて、20㎝～30㎝くらいの波がザーっと流れてきた。「津波が来たから逃げろー逃げろー」と大騒ぎをしたが、どこにも行き場がなく、ポンプ小屋の近辺でウロウロしていた。最終的には、胸の高さまで水が来た。

私ともう１名の団員はポンプ小屋の２階に避難した。他の団員は仙台港の反対側の市役所通りの

砂押川が溢れたら大変なので警戒するということで、川の堤防まで走っていった。結局、津波は砂押川の堤防で止まった。津波は最初30㎝ぐらいの高さだったのが、直ぐに1.5ｍぐらいの高さになった。ポンプ小屋２階から見える範囲で、大声で「そこは危ないから、あっちに逃げろー」と声をかけた。電気も止まったので、スピーカーも使えず、ポンプ小屋から「逃げろー」と大声で呼びかけるだけで、離れたところまでは行けず、避難誘導できる状況ではなかった。土手の方に逃げた団員は、だんだん近くに水が来て、騒いでいた。その時、住民は見えなかった。だいたいは近くの公民館に避難したようだ。その後、他の団員が集まってきて、みんなで手分けして被害調査をした。

自衛隊と一緒に救助活動

夜、自衛隊が来て、一緒に救助活動が始まった。ポンプ小屋の近くにも津波により多くの車が流れてきて、車の上に乗っている人が助けを求めていたが、建物に取り残されて助けを求める人は見えなかった。パトカーも流れてきて、警察官が２名乗っていたので助けてポンプ小屋に避難させた。その後も水は引かず、だんだん増えていった。

救助に使う船は自衛隊のアルミボートを使った。団にはゴムボートがあるが、空気を入れることができないため使い物にならず、結局、自衛隊と一緒に救助活動をした。救出した人は、自衛隊の車で文化センター等に搬送した。団員が一緒にボートに乗ったり、ボートで連れてきた人を車に連れていったりはしているが、独自には救助活動はしていない。救助は朝方まで行い、20～30人は救助した。夜間は、暗闇の中を声のする方向に向かっていく感じで、ヘルメットについている灯りを頼りに活動していた。また、当日は、車から脱出したと思われるが溺れてしまった女性の遺体を収容した。翌日、明るくなった頃には水はまだ残っていたが、夕方までにはだいたい水が引いた。

団本部や市役所とは当初、無線でやりとりをしていた。そのうちバッテリーがなくなり、発電機も水没してしまったので、朝方頃には何もできない状況となった。その後、機械に詳しい団員が発電機をばらして修理し、なんとか使えるようになり、無線機や携帯電話の充電、ポンプ小屋２階の暖房に使用できた。トランシーバーは市から支給されたものが３台あったが、１台は水没、１台は充電器が流された。携帯電話が回復してきたので、主に携帯電話でやりとりした。携帯電話が本格的に回復したのは２、３日後だったと思う。

イオン多賀城南側仙台港より３ｍ～４ｍの津波

地震直後、広報のためポンプ車に乗っていった団員が夜中過ぎに徒歩で戻ってきた。ポンプ車は橋のたもとに置いてきて大丈夫だった。津波が砂押川を越えそうだということで、ポンプ車の中にいても連絡が取れないので、徒歩で戻ってきたようだ。その後、水が引いてからポンプ車を取りに行った。

２日目以降の活動としては、停電で信号機が止まっているので、４日間ほど交通整理をした。車は多くはなかったが、人やバイク、自転車等の軽車両が通るようになり、さらに自衛隊や応援部隊の重機なども走っていたので、ポンプ小屋の近くの信号２箇所くらいで、交通整理をした。

そして、約20日間、救助・捜索活動を行った。建築会社の重機で道路を確保しながら、遺体を収容した。私の分団だけでは人手が足りないので、第１・２・３分団に手伝ってもらった。第４・７・８分団は隣の大代地区（６分団）に応援に行っている。遺体を20人～30人程収容したが、多くは車の中や下で発見された。遺体を見つけた場合、ブルーシートに包んで、その場に置いたままで警察に連絡し、遺体を安置所に運ぶことはしな

かった。遺体は、最初の１週間くらいが多かった。遺体を探そうとしていたわけではなく、道路確保している時に、車の中や近くで発見した。

３月15日に分団長会議があり、話し合いの結果、団員は遺体収容をしないという結論になり、15日～20日ぐらいで遺体捜索はやめることになった。その後も、市役所からの指示で、行方の分からない人がいるので、某アパートに行ってくれということはあった。また、水が引いてから、３名ぐらいのグループで、前に捜索した地区に行くと、平屋の借家で亡くなっている人が２、３人いた。平屋のために逃げるところがなかったようだ。

ポンプ車が一番早い

道路が通るようになると、自衛隊や警察などの応援が来るようになったので、団は20日間ぐらいで捜索の一区切りをつけた。その後は、物資の配布などに力を入れた。３月中はポンプ小屋の２階に常時20人くらいが寝泊まりしていた。

私の地域で一番危険だったのは、ガソリン泥棒だった。津波被害を受けた車からガソリンを抜き取る者がいたため、夜間、２時間おきに巡回をしていた。巡回中に人影を見て、すぐ走って行ってみると、20ℓの缶を置いて逃げた。そういう缶を５個くらい没収した。なお、消防団は、けが人等の救急搬送はせず、自衛隊が行っていた。避難所でけがをした人は、直接、市役所に連絡して、救急車で搬送してもらっていた。

また、少し離れた所のマンションに住んでいる人の食糧確保のため、10日間くらいは、救援物資の配布をした。これは市からの要請ではなく、５分団独自の判断で行い、市から物資をもらってポンプ車で配布した。マンションの上に住民がいて、避難できずに困っていることから、ポンプ車で持って行くのが一番良いと判断した。また、団員の友達など東京方面にいる人が支援物資（おにぎり、カップラーメン、衣類など）を送ってくれ、ポンプ小屋の倉庫に置いていたが、その倉庫がいっぱいになったので、それを振り分けて、市の物資と合わせて住民に配布した。なお、避難所に避難せず、自宅に残っていた住民が結構いたようで、ポンプ車の拡声器で「持ってきましたよ」と広報すると、住民がたくさん集まってくる状況だった。また、市では何も広報する手段がなく、ポンプ車が一番早いということで、地区の公民館からの依頼で、給水車の来る時間の広報をしていた。

３月いっぱいで団の活動は一区切りつき、４月１日からは、自宅待機になった。その後、市役所からの電話で、４月２日か３日頃に上水道が復旧するので、その広報をしてほしいと依頼があった。その他にも、いろいろと広報活動を行った。また、３月17日頃、大代地区（６分団の管轄）で火災があり、出動している。津波に絡むものではない。砂押川から４台のポンプ車でホースを延長して水槽に水を供給して水利を確保し消火したようだ。火災現場の近くに水槽があったが、震災で住民がそこから水を汲んで使ったので、水がなくなったようだ。

津波対応の訓練は今までしていない

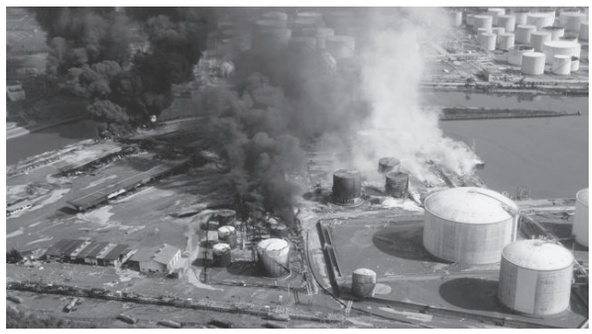
団員の構成は勤め人が多く、日中は地元にはあまりいないが、それでも団員34名のうち10名くらいは地元におり、最初にその約10名が集まった。仙台港近辺の工場地帯に勤めている人たちが津波が来るということで会社から引き上げてきて、そのうちの団員たちも集まってきた。最終的には25、26名ぐらいは集まった。団全体では、ポンプ小屋に来る途中で１名の団員が亡くなり、お父さんを亡くされた団員が１名いる。また、副分団長の兄弟が行方不明で、団員全員で５日間くらい捜していた。別の人が発見して、遺体収容所にいることがわかった。団員のうち、自宅が被災していないのは２名だけであった。消防団員は、避難所にいる人、借家を借りている人、家を直して戻った人など様々であるが、仮設住宅に入ってバラバラになるということはない。なお、分団の管内で

亡くなった人は、わかっている範囲で６人はいた。多くは地元の人ではなく、車で移動中に津波に巻き込まれて亡くなったようだ。イオンなど大型店から流れてきた車もあると思う。地元住民は、津波警報を聞いて、隣近所で声をかけて避難していたと思う。多賀城市内では、２階に上がれば助かったので、亡くなった人は多くない。

ポンプ小屋は１m40cm～50cm程浸水した。水が引いた後は、２階で寝泊まりしながら救助・捜索活動を行った。地震翌日の昼頃までは何も食べずに活動しており、その後、近くの寺に行き、何でもいいから食糧を分けて欲しいと頼み、お菓子など貰って食べた。また、被害にあわなかった家が高台に何軒かあり、そこの団員が炊き出しを持ってきてくれた。夜は近くの公民館に行って、食糧を分けてくださいと頼んで、おにぎりを１人１個ずつ分けてもらった。その後、市に連絡して、おにぎり、カップラーメン、水を支給してもらえるようになったので、市役所に取りにいった。ポンプ小屋にはプロパンガスはあったので、お湯を沸かして毎日カップラーメンを食べることができた。燃料の確保は、市役所から、開いているガソリンスタンドの連絡を受けて、そこへ給油しにいった。燃料が不足して困ったということはなかった。

私の自宅も、家の中が60cm～70cmの高さまで浸水した。３月中は消防団活動のため家に帰れず、その後帰ったら、家の中は空で家具等全部が廃棄されていたものの、家族は無事だった。私の自宅の近くに娘夫婦が住んでいて、そこも浸水はしたが、早めに家族で掃除して、住めるようになったので、そこに家族10人が２か月間暮らした。自宅も２か月くらいで直って、今は自宅に戻っている。

捜索活動などで遺体を扱う事が、若い団員にはショックだったようだが、今は治っている。また、仕事場からポンプ小屋に来る途中で、団員１名が亡くなっているので、それにはショックを受けた。団員みんなが疲れていた。１日平均20名はポンプ小屋に泊まった。ただ、用がある時は「家に行きます」「今日は家の片付けします」と、お互いに臨機応変にやっていた。多くの団員は自家用車を流されたため、団員がリースで車を借りてきて、皆で使うことができ、非常に助かった。



ＪＸ日鉱日石エネルギー㈱仙台製油所火災

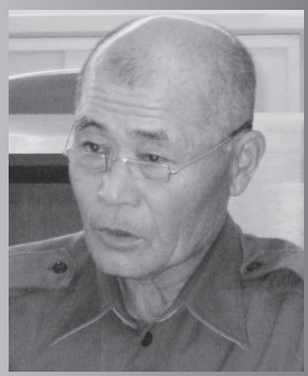
計画では、津波警報が出ると、ポンプ小屋に集合することになっており、チリ地震津波の時（大津波警報発令）も20名くらいが集まり、市役所の指示で、砂押川の潮位観測所に監視に向かった。３月９日（津波注意報発令）も10名以上がポンプ小屋に来て、広報の後、潮位観測を行った。今回の大震災の時は、すぐに津波が来そうだったので、潮位観測所へは行かず、仙台港近辺の被害が大きくなりそうな所に向かった。なお、避難訓練はしているが、津波対応の訓練は今までしていない。

多賀城市では、今まで津波がきたことがない。中学１年の時にチリ地震津波があって、塩釜まで見に行って、これが津波かと思った。今まで警報は何回も出ているが、砂押川で水位が40cm～50cmくらい上がるだけだった。30年ほど前に「8.5水害」があり、５分団の管轄地域が浸水し、深いところで1.5mぐらいの水が来ていた。大雨というのは頭に入っているが、津波は考えていなかった。

仙台港に監視カメラを…

消防団では海の様子がわからないので、仙台港に監視カメラを置いた方が良いと思う。また、団の装備として、ゴムボートだけではなく、アルミボートを装備できれば、ガレキがあるところでも捜索活動ができる。ポンプ小屋には食糧も毛布も何もなかったので、現在は毛布をストックしている。当時も備えておいた方が良かった。

より高いところに避難するという広報が重要



宮城県多賀城市消防団
第６分団　分団長　**伊藤　　勲**（66歳）
消防団歴　32年（造園業）

不意打ちをくらった心境

当時は、腰の調子が悪かったので、七ヶ浜町のアクアマリーナという温泉プールに行っており、入浴中に地震が来た。最初、これは宮城県沖の地震だなと思った。分団のある地域では、常日頃から地震＝津波という意識が高く、すぐに津波の広報活動をしなければいけないと思った。車を使い、10分ほどで家に戻り、無線機とヘルメットを持参して、ポンプ小屋に着いた。ポンプ小屋は、自宅から歩いても５、６分のところにあるが、着くとシャッターを開け、ポンプ車のエンジンをかけた。機関員の団員が１名来たので、一緒に大代地区の浸水すると思われる地域を重点的に回った。その後、桜木地区にも大津波警報の広報をして、ポンプ小屋に戻ってきた。通常35分くらいかかるところなので、地震発生から40分～50分ほどが経っていたと思う。ポンプ小屋は高い所ではないので、橋のたもとの高い場所にポンプ車を置くように指示した。ポンプ車は、１年前に買っていただいたので、ダメにしたら大変だと思った。それから10分くらいしてから津波が襲来した。

その時、ポンプ小屋には、私も含めて５名くらいの団員が待機していた。津波は、第１波とか第２波という感覚ではなく、ものすごい勢いで襲ってきた。今まで体験したことがない状態で、ただただ恐れるような気持ちで、不意打ちをくらった心境で見ていた。

ポンプ小屋の向かいに生協があり、150人くらいの買い物客が店舗の外に出ていたので、生協の屋上駐車場に避難するように誘導した。駐在所の警官も大津波が来ると広報していたので、その警官から地区外の人の動きなどを聞いた。その段階で80％～90％の人は、避難所に向かっていると聞いたので、日頃からの備えが功を奏したと感じた。

当日は、雪が降っていて寒かった。16時半ぐらいに薄暗くなってきて、高齢者が長時間外にいたのでは大変だと思い、生協の屋上駐車場に避難している人を、多賀城市の避難所に指定されている東小学校に移動した方が良いと判断し、ポンプ車で、津波の影響を受けていない道をピストン搬送した、また、東小学校は徒歩でも10分くらいのところなので、元気な人には歩いてもらった。なお、高台の民家には自宅を開放してもらい、10人～15人ほどを２、３日の間、お世話してもらっている。

燃やし尽くして鎮火を待つしかない

当日、暗くなってから、８人ほどの住民と連絡がとれないと町内会長から言われた。懐中電灯を持って、連絡のとれない家に行って、声かけをしたが応答がなかった。翌日になると、家に２人取り残されているとの連絡があり、その家から、寝たきりで足の不自由な方を２階からおぶって下ろ

し、ポンプ車に乗せて避難所へ搬送した。その家には、息子さんも一緒にいたが、床上1.6m～1.7mくらい浸水しているにもかかわらず、ベッドの高さが50cmくらいなのにその人は濡れていなかった。ベッド自体が浮いて助かったという話だった。ただ、ポンプ車に乗せるのに苦労した。最初、どこに搬送すれば良いかと迷ったが、避難所に搬送すれば、救急車も来ると思い、避難所に搬送した。もう１人は、一晩、暖房もない真っ暗なところにいた。１階は家財道具が散乱しており、団員４名で２階から下ろして、ポンプ車に乗せた。本人は恐怖と寒さで震えていた。

地区内には、家や車に取り残された人がおらず、助けを求める人もいなかった。津波によるけが人の対応もなかった。12日か13日の日中に、路上で倒れていた人がいたので、人工呼吸をし、救急車が来たので、搬送してもらった。また、物置の下敷きになった人が１人いると住民から連絡があり、団員が確認に行ったが、駐在所の警察官も来たので、団員は関わらなかった。地区内で行方不明だった８人は、最終的に所在が分かった。高齢者なので、避難所で呼びかけても聞こえなかったようだ。結局、大代地区で亡くなったのは３、４人で、他の地区や移動中に亡くなった人が多かったようだ。地区では、浸水はしているが、家が流されたところはないので、水の勢いがそれほどではなかったようだ。しかし、天井近くまで水がきたところもあり、家の中は使い物にならない。

11日の21時50分頃にＪＸ日鉱日石エネルギー㈱の石油コンビナートの火災があり、ポンプ小屋からも煙が見えた。大規模な火事なので、団が行っても手が出せないと判断して待機していた。当時、ＪＸの担当者がポンプ車置き場に来て、火災を消すことはできず、すべてを燃やし尽くして自然鎮火を待つしかないと言われた。万が一、大きなタンクに引火した場合、大規模火災になる可能性があることを念頭に置いて行動して欲しいと連絡を受けた。自衛隊に避難した人が、夜中23時頃で150人ぐらいいたが、ＪＸの火災現場から２km以上離れるように指示されたので、自衛隊や消防団の車両で、避難者を別の避難所に搬送した。避難した人の中には、煙を吸って喉を痛めたり、声が出なくなった人もいた。

ＪＸ日鉱日石エネルギー㈱仙台精油所火災現場

砂押川の自然水利を利用して

地震翌日からは、安否確認しようとする人の車両が増えてきた。通常通る道路が浸水しているので、浸水していない別のルートの道案内をした。日増しに支援物資を運ぶ車両も通るようになって、県道に団員が立って道案内した。また、ドライバーに他の地区の道路状況を聞いたりした。

地震後、火災は何件か発生している。13日朝７時頃にマンションで火災が発生したが、断水で消火栓が使えず、砂押川から水をとり、被害が少なかった第３分団や第７分団がポンプ４、５台をホースでつないで水利を確保し、消火活動をした。消火活動中に、先程のコンビナート火災の件で一時退避と言われたが、消防団だけが残って消火活動を続けた。14日には車両火災が発生した。津波で流れてきた車両で、キーを差したままの状態のため、通電して火災が発生し、ボンネットが燃えている状態だった。消火器で消火しようとしたが、ポンプ車にのせている１本だけでは足りず、近くの事務所の消火器を借りて消火した。あまり延焼することはないと思われたが、ガソリンがあるので心配した。17日８時半頃にも車両火災が発生した。車が立木に寄っていて、建材会社の社屋も燃えた。緊急消防援助隊も応援に来た。その時

は、消火活動の手伝いとして、泡消火薬剤の搬送やホースの片付けなど行った。17日17時52分には、大代２丁目で住宅火災が発生した。常備消防よりも早く到着し、消火活動を開始するため、水利を取ろうと防火水槽の蓋を開けたら水が３分の１ぐらい減っており、側に見慣れないホースがあった。この地区の自治会が生活用水として、防火水槽の水を汲み上げて使用したためだった。その後、常備消防、自衛隊が来て、第３・５・７・８分団も応援にきた。砂押川の自然水利を利用して、中継ポンプで常備消防のタンク車に水を供給し、タンク車から水を確保して常備消防のポンプ車から放水した。出火原因は納屋で焼き肉をしていたためだった。

地震後３日間ぐらいは交替制の24時間態勢で、大代橋のたもとの自家用車やポンプ車内で仮眠をとりながら待機していた。ポンプ小屋は1.6m浸水し、備品やボートが流出した。後日、破損したボートを発見した。団員には、ケガをしないようにと、情報を的確に入手し、総合的に判断するように指示した。12日の夜、待機場所にテントを張った。団員が19名いる分団で、当時は12、13名ほど来ていたが、食糧がなかった。自分たちで炊き出しをする余裕がないため、自治会長さんにお願いして、比較的被害の少ない地区に炊き出しをしてもらえるように頼み、それから10日以上、食糧を提供してもらった。その後、市役所からパンやおにぎりが１日１回配られるようになった。また、緊急車両には優先的に燃料を入れることができた。生協から、車両の燃料がないために物資支援ができないので、生協から避難所まで物資を持って行ってほしいと消防団に依頼があった。水や日用品（消毒薬、使い捨てカイロ、歯ブラシ）などを、２箇所の避難所に搬送した。また、支援物資で衣料品の場合、中古のものは余ってしまい、余った物20箱くらいが消防団の方に持ち込まれた。

朝･晩は警戒のため地区内を巡回していた。真夜中、見慣れない車が酸素ボンベなどを積んでいたので、「どちらに行かれるのか？」と聞いた。第５分団管内では、窃盗がらみの人が多かったと後で聞いたが、第６分団管内では消防団が主要な道路にいたので、荒らさないで帰っていったようだ。

団員の６割は金物屋、大工などの自営業

３、４日経つと、団員も疲れてきて、指示してもすぐには受け入れられなくなってきた。指示をすると、「消防団の任務外ではないか」と意見があった。しかし、相談や協議している時間がないため、団長のトップダウンで理解してくださいと説得した。団員で家族を亡くした人はおらず、ケガをしたという人も聞いていない。しかし、80歳～90歳近いおばあさんを抱えていた団員は、避難するとき「私はいいから、あんたたち若い人達だけ逃げなさい」と言われ困ったとの事だった。

団員も自宅の片付けをしなければいけないという焦りがあった。18日になって、浸水被害を受けた団員に「片づけで協力いただきたい方は意思表示してください」と聞いたところ、２名の希望者があった。団員を２箇所に分けて、瓦礫撤去、通路啓開、ヘドロ除去などの作業をした。なお、団員の６割は金物屋、大工、漁業などの自営業で、サラリーマンは４割程度である。発災時の15時近くは、ほとんどの団員が作業現場や職場にいた。

19日に分団長会議があり、被害の少なかった分団が、被害の大きい第５分団、第６分団の応援にあたることになった。活動としては、遺体収容や交通整理、窃盗等の警戒を重点的にやるように依頼した。また、市役所の担当課長から、瓦礫撤去の業者の人達が動きやすいように案内（危険箇所の監視）をするよう言われた。なお、第６分団は商店街がないので、車などに取り残された人は少なかった。

20日から３日間ぐらいの間、第４・７・８分団から十何名もの応援が来ていた。しかし、第６分団内では、遺体収容はないし、瓦礫撤去の業者には、すでに別の案内の人が付いて、団が特に活動することはなかった。また、市役所からは、不公平感からクレームがつくので、民家の後片付けの手伝いはしないように言われていた。応援に来てくれたのに、何もしてもらわないのは失礼なの

で、団員の家の片づけを手伝ってもらった。

23日頃になると、ボランティアも来るようになった。埼玉の大学生４人がボランティアをするところを探していたが断られていたので、地元の医療機関でボランティアを受け入れてもらえるように斡旋した。また、地元の40歳代くらいの女性が自宅の後片づけで、途方に暮れていたので、ボランティアを紹介した。しかし、ボランティアもすべてが善良な人というわけではなく、ヘドロで汚れた紙幣を食堂で出して、店から警察に通報されたという後日談もあった。

29日に分団長会議があり、第５分団と第６分団は分団待機になった。朝・晩と巡回する程度の活動で、任務も減った。その後、ポンプ車や拡声器で給水の広報を１週間ほどやった。３月31日で分団待機も終わり、自宅待機になった。４名ほどの自宅が浸水したために、その後も分団のポンプ小屋の２階に寝泊まりした。その後、２回くらいポンプ小屋で反省会を行った。

「母と連絡がとれない」

地震当時、妻はイオンの近くに勤めていたが、地震といっても津波が来ると思っていなかった。イオンの買い物客が「津波だー」と言って逃げてきたので、気づいて逃げた。一晩連絡がつかなかったが、姉の所に世話になっていた。車を捨てて逃げたのが良かった。閖上にいた従兄弟は、避難する車が渋滞しているので、車を脱出して電柱に登った。水が引いた後、濡れた状態で高速道路を歩いて帰ってきた。翌日、私の姪が「母と連絡がとれない」とやってきた。当時、安否確認できない人は多かった。会社が仙台市宮城野区なので、そこにいるのではないかと言っていたが、会社から出て、産業道路を通って帰ろうとしていたことがわかった。その後、見つかったと連絡があったが、車の中で亡くなっていた。消防団活動も優先しなければならないし、どうしたらよいか悩んだ。

４月７日の余震の時は自宅にいたが、あの時も

ＪＸ日鉱日石エネルギー㈱仙台精油所火災現場

慌てた。住民が車で避難所に一挙に向かったため、避難所の文化センターまでの道が渋滞して大変だったと聞いた。津波はなかったが、揺れによる被害が少しあった。余震は毎日のようにあるが、そのたびに注意報が出ると広報しなければならず、気の休まる時がなく、自分は４kgぐらい痩せた。

正確な情報が得られない

今回の地震で、消防団の管内では、津波浸水区域の９割の人は避難したと思う。高齢者も、孫や子どもが迎えに来たので、すぐに逃げたので助かった。避難は、避難所に行くだけではなく、自分のいるところのより高いところに避難するという広報が重要である。「より高いところに避難してください」という文言に変えた方がいい。そういう啓発をしないと人命は救えない。

団員の心理状態としては、疲れは理解できるし、よくやってくれたと思う。情報を得る、情報を流す、自己判断しないで報告するということに念を押していた。また、装備としては、水の中に助けにいく時のライフジャケットや浮き輪が必要である。これは水害の時にも使える。投光器や発電機より、ライフジャケットを優先してほしい。無線機は３台あったが、１台の充電機はポンプ小屋に置いていて水浸しになった。もう１名が持っている無線も充電機が流され、結局１台のみが使用できた。トランシーバーは市役所から支給されているものがあるが、情報手段はもっと整備しないと、正確な情報が得られない。